

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

なぜ現代文学を読むのか

二宮 大輔

題名に反して、なぜイタリア現代文学は読まれないのか。そう改めて思ったのは、没後 700 年にあたる今年、イタリア文学の原点でもある 13 世紀の詩人ダンテ・アリギエーリのシンポジウムがたくさん開催されたからだ。オンラインで視聴できるものも多く、門外漢の私も少しはダンテに触れる機会があった。そして申し訳ないがやはりダンテを読む気になれなかった。その理由は、古典ばかりを称賛するアカデミズムに対して天邪鬼な気持ちになっているというのが半分と、正直、読んでもピンとこないというのが半分だ。イタリア語を読むことは、話す、聞くことよりも、自分にとってはずっと難しい。そこにきて、古いイタリア語で書かれた文章を読んで理解するとなると、なおさら困難を極める。いっぽう現代文学はダンテよりもどう考えても読みやすいし、時代やテーマが身近なことから親近感も湧きやすい。つまりダンテを始めとする古典よりも、はるかにとつきやすい。現代文学から読みはじめて徐々に古典にさかのぼっていくという順番のほうが合理的な読書に思える。にもかかわらず、周りでイタリア現代文学を率先して読む人はとても少ない。

ここで、二点ほど確認しておきたい。まずは現代文学の「現代」とは、いつごろのことか。図書館などでは「1900 年代」というカテゴリーで分類されることが多い。イタリア統一の後、第一次世界大戦をはさみ、1923 年にジェイムス・ジョイスの友人イタロ・ズヴェーヴォが大著『ゼーノの意識』を刊

行し、1934 年に劇作家ルイジ・ピランデッロがノーベル文学賞を獲得する。第二次世界大戦中から戦後にかけて、市民の貧困や闘争をテーマにしたネオレアリズモが興り、1963 年にそれまでの文学の在り方を否定する前衛運動グループ 63 が結成される。その辺りで文学史としての現代は忽然と姿を消し、それ以降は無数の現代作家がいるばかりで、注目が集まることはほとんどない。

ダンテのそれとは別のオンライン講演で、現代文学専門の先生が「亡くなっている、未発表の遺稿があり、まだ評価が決定していない作家は古典とは言えない」という趣旨のことを述べられていた。裏を返せば評価が決定していない作家は現代文学に属する。評価が決定していないという不完全性が現代文学の特徴であり、それが茫洋としたフロンティアを感じさせる魅力になっているのかもしれない。ただ、私に言わせれば、ネオレアリズモから出発したイタロ・カルヴィーノや、グループ 63 にも関わったウンベルト・エーコなど、図書館の「1900 年代」の本棚で幅を利かせている作家たちは、現代ではなく新しい時代の古典だ。「評価が決定していない作家」という定義を推し進めて、国語の教科書や一般のイタリア文学史では紹介されない現存の作家こそが、現代文学の最先端であり真髄だと思っている。

次に現代文学の「文学」とは何を意味しているのか。以前どこかで書いたのだが、ローマ留学中に知り合った同年代のイタリア人に、自分がイタリ

ア文学を勉強しているという話をした。彼に「何を
読んでいるの？」と質問されたので、「ロベルト・サ
ヴィアーノ」と答えたら、軽く鼻で笑われてしまった。
ロベルト・サヴィアーノというのは、2006年にナポ
リの犯罪組織カモッラの実態を詳細に描いた『死
都ゴモラ』が大ヒットしたジャーナリストだ。以降も
世界の麻薬流通や社会問題に切り込み、センセ
ーショナルな作品を発表し続けている。鼻で笑っ
た彼に、ロベルト・サヴィアーノなどを読んでいる
私を嘲笑する意図はまったくなかったことは理解
している。ただ彼はサヴィアーノなどのベストセー
ラー作家は文学とみなしていないという一般的な見
解を持ち合わせており、ゆえに私の発言に、思わ
ず笑みがこぼれてしまったのだ。

辞書などの一般的な意味では、文字による芸
術表現のことを文学と呼ぶが、これを拡大解釈す
ると、サヴィアーノなどのベストセラー作家だけ
なく、マンションポエムやトイレの落書きにいたる
まで、文字として人の心を良くも悪くも動かすもの
は、すべて文学だと定義できると私は思っている。
ここに文学の範疇を革新するというもう一つのフ
ロントニアが現れる。そして、それらの新しい表現
は、古典のように時代を越えて受け継がれること
はなく、次々と生まれては消えていく。ゆえに文学
と認識して確かに評価していく作業は、今この瞬
間にすべき必要がある。

以上のごく個人的な解釈から、イタリア現代文
学を読む行為は、現代というフロントニアからイタ
リア語で書かれた優れた表現を見つけ出して評
価していくという、極めてやりがいのある作業だ
とされている。しかもそれは、現代イタリア語のほう
が読みやすいという観点からも、インターネットの
普及で外国語に触れることが容易になったという
観点からも、誰でも気軽にできるはずだ。この試
みを実践する人がなぜ少ないのか。

先述のオンライン講演では、現代文学を読むに
あたって、「古典の素地がないと現代のものを評
価しようがない。ただ好き嫌いのお話で終わってし
まう」という意見が出た。それはまったくその通り
なのだが、現代文学を読まない理由にはならない。
むしろ古典を読むべき理由だ。古典を読む理由と
言えば、イタロ・カルヴィーノは、文芸評論集『なぜ
古典を読むのか』の冒頭のエッセイで古典の定義

を14個列記している。そのうちの一つは以下のよ
うなものだ。

古典とは、他の古典を読んでから読む本で
ある。他の古典を何冊か読んだ上でその本を
読むと、たちまちそれが系譜のどのあたりに位
置するものかが理解できる。

(須賀敦子訳、河出書房新社、2012年)

文章冒頭の「古典」を「現代文学」に置き換える
とどうだろう。なんとなく成立する気がしないだろ
うか。つまり、現代文学に求められるのは、生まれ
ては消えていく無数の文学作品を掘り出して古典
へと昇華させていく作業なのだ。



【トマーズ・ピンチョ】

出典：https://it.wikipedia.org/wiki/Tommaso_Pincio

ここで一気に手前みそな話になるが、トマ
ーズ・ピンチョという作家の短編「紙とヘビ」を翻訳し
た。2019年から毎年一回刊行されている外国文
学アンソロジー『翻訳文学紀行』の第三弾に、縁
があって参加させてもらった。企画をしているの

は「ことたび」という名で活動されているドイツ文学の元研究者の方。まだ若い女性で、自費出版ながら編集、装丁ともに本格的で、何より多くの読者を獲得している。その訳者あとがきでも書いたのだが、ローマ留学中の 2000 年代に友人からもらった新聞の切り抜きに掲載されていた本当に短い掌編が「紙とヘビ」だ。作中では、中国人街と化したヴィットリオ広場のバールに来た著者のピンチョが、レジにいる中国人の青年を眺めるだけで、取り立てて何も起こらない。その奇妙さと、中国人街で疎外感を覚える著者の姿の生々しさが心に残り、私がイタリア現代文学に興味を持つきっかけになった。

それでは、他の古典を読んだつもりになって、ピンチョが文学の系譜のどのあたりに位置するか考えてみよう。1963 年生まれの本マーゾ・ピンチョは、世代的には 1980 年代に多数の若手作家に影響を与えたピエル・ヴィットリオ・トンデッリのさらに下、90 年代のアンソロジー『人食い人種の青春』の作家たちと同時期にデビューしている。ところがメインストリームとは少し離れた特異なポジションにおり、書く内容も、自身の住むヴィットリオ広場地区や、夭折したロックスターのカート・コヴァーンに強いこだわりを見せており、他の作家にはない独特の作風をしている。一時期アメリカに住んでいた経験を持ち、90 年代のアメリカン・カルチャーに心酔し、またトマス・ピンチオンをイタリア語風にした筆名本マーゾ・ピンチョからもわかるように、現代のアメリカ文学にも精通している。ビート・ジェネレーションを代表するウィリアム・バロウズの片りんも感じさせるが、「紙とヘビ」では『ライ麦畑で捕まえて』の J・D・サリンジャーの卑屈なモノローグの雰囲気もある。またヴィットリオ広場で展開する「紙とヘビ」が醸し出す不気味な静けさは、舞台を同じくするカルロ・エミリオ・ガッダ『メルラーナ街の混沌たる殺人事件』と対比させると面白い。つまり戦後すぐにガッダが描いた騒がしくて混沌としたローマの一地区が、2000 年代には中国人移民に占領されて不気味に静まり返っているという対比だ。

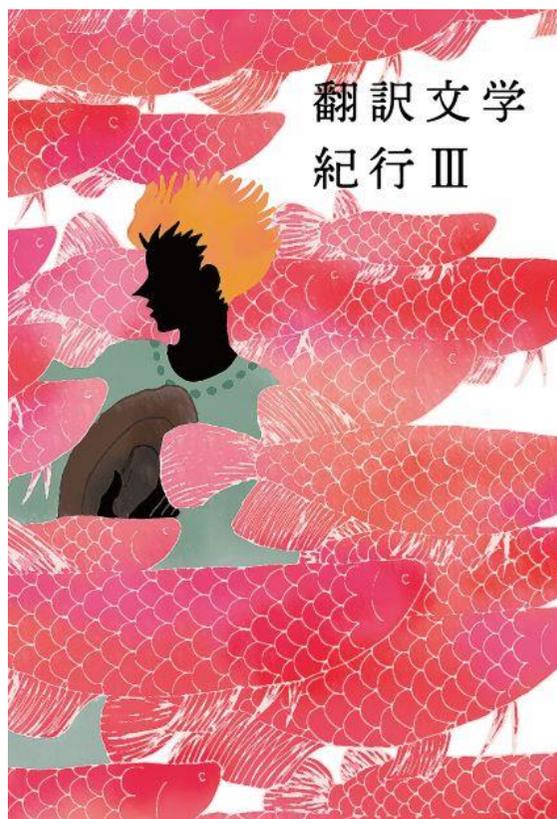
このように、現代の小説でも古典的なアプローチは可能だ。カルヴィーノは『なぜ古典を読むのか』で、古典を以下のようにも定義している。

古典とは、人から聞いたりそれについて読んだりして、知りつくしているつもりになっていても、いざ自分で読んでみると、あたらしい、予期しなかった、それまでだれにも読まれたことのない作品に思える本である。

古典とは、読んでそれが好きになった人にとって、ひとつの豊かさとなる本だ。しかし、これを、よりよい条件で初めて味わう幸運にまだめぐりあっていない人間にとっても、おなじくらい重要な資産だ。

(同書より)

これらの提言は現代文学にもおよそ当てはまるのではないだろうか。現代文学の最先端のフロンティアにも、古典が見出せるのではないだろうか。そこで最後に宣伝しておきたい。ピンチョの訳書が収録された『翻訳文学紀行 III』(ことばのたび社、2021 年)は京都や大阪の書店、もしくはインターネットでも購入可能だ。拙訳をとおして、イタリア現代文学に少しでも触れてもらえれば嬉しい。



(翻訳家、元当館語学受講生)

ジロを興した新聞

La Gazzetta dello Sport

谷口 和久

イタリアやフランスをはじめとしたヨーロッパでは、自転車レースは文化のひとつであり、生活の一部に根づいている。われわれ日本のファンからすると、なんともあこがれの状況だ。

ただ、ここで忘れてはならないのは、一朝一夕でそうなったわけではもちろんないし、また自転車レース単体でかち得たわけでもないということだ。時代の成長とうまくシンクロしてきたからこそ、こんにちのポジションを築くことができた。それに加え、レースを伝え盛り上げるメディアの存在もかかせない。メディアの成長とうまくリンクしてきたことも、大きな要因だろう。

自転車レースが始まった 19 世紀後半は大衆社会の勃興期であり、大衆をターゲットとした新聞が続々と生まれた時代でもあった。主だったところは以下の通り。いずれも 140 年以上前の発刊だが、現在まで続く老舗紙である。

〈発刊年〉	〈紙名〉	〈拠点〉
1867	ラ・スタンパ	トリノ
1876	コッリエーレ・デッラ・セーラ	ミラノ
1878	メッサジェーロ	ローマ

自転車人気の高まりを受け、1893 年にコッリエーレ・デッラ・セーラ社は「イル・チクロ(自転車)」というタイトルの週刊誌を発行、読者をぐんぐん獲得していった。

先行の競合誌は手を変え品を変え対抗策を打つものの決定打とはならず、最終的にスポーツ全般を扱う新聞を発行することにした。新聞の名は『ガッゼッタ・デッロ・スポルト』。

ガッゼッタ(gazzetta)という呼称は新聞に使われているのをよく見かけるが、もともとはヴェネツィ

ア共和国で使われていた貨幣のひとつで、当時の新聞が1ガッゼッタで販売されたことから、「新聞=ガッゼッタ」となったという由来である。

ガッゼッタ・デッロ・スポルト(以下『ガッゼッタ』)は既存の新聞・雑誌を吸収合併して立ち上げられたため、初期の版ではタイトルが複数併記されるという摩訶不思議な状況が続いたが、しばらくしてガッゼッタ一本に収れんされた。



(1896年4月3日号)



(1896年4月30日号)



(1899年1月2日号)

【ガッゼッタのタイトル部の変遷】

出典: https://it.wikipedia.org/wiki/La_Gazzetta_dello_Sport

初期の内容は、自転車をはじめとして、競馬、フエニング、体操競技、テニス等々。お気づきのように、この中にはサッカーが入っていないのだが、当時サッカーはまだメジャースポーツではなかったのだろう。

1896年に発刊された第一号でガッゼッタは編集方針を以下のように打ち出している。

スポーツを取り扱うには、時代の流れを読み、予測し、先取りする能力が求められる。スポーツ新聞は、ただ単に状況を知らせたり、結果を記録したりするだけでなく、先を読み、挑戦し、成しとげなければならない。

ちなみに、アメリカの週刊誌『スポーツ・イラストレイテッド』は、「スコアなど載せるな。スコアの背後に隠れているインサイド・ストーリーを追いかける」というコンセプトを掲げているが、ガッツェッタの方がより先取的で、積極的に世の中に打ち出そうとする姿勢が伝わってくる。

先を読み挑戦する施策の一環としてガッツェッタは19世紀末から様々なスポーツ・イベントを企画・主催しはじめた。ランニングやモータースポーツ、そして本命の自転車レースだ。

1905年にジロ・ディ・ロンバルディア、1907年にミラノ・サンレモ、そして1909年にジロ・ディ・イタリア。いずれも、こんにちまで続くビッグ・レースである。

ジロ・ディ・ロンバルディアは、ミラノを起点にロンバルディアの山や平野をぐるりと回るワンデー・レース(一日で終わるレース)である。コースはたびたび変更されてきたものの、コモ湖畔の丘の上に建つサイクリストの守護教会マドンナ・デル・ギザッロは必ずコースに組み込まれる。毎年10月に開催されることから「落ち葉のレース」ともよばれ、伝統と格式のあるクラシック・レースのひとつに数えられる。



【マドンナ・デル・ギザッロ】

ミラノ・サンレモは、こちらミラノを起点にしたワンデー・レースだが、音楽祭でも知られる海辺の町サンレモへ向けて片道一直線に進んでいくコース・レイアウトだ。春先に行われることから「ラ・プリマヴェーラ(春のレース)」ともよばれる。シーズンのはじめに選手の仕上がりがや新チームの力を見るという意味でも、重要なレースだ。これもクラシック・レースのひとつに位置づけられている。

そして、ジロ・ディ・イタリアはいまでもなくイタリア最大のレースであり、世界三大ステージ・レース(何日間もかけて行うレース)に数えられる。ちなみに、三大ステージ・レースの他の2つは、フランスのツール・ド・フランスと、スペインのブエルタ・ア・エスパーニャである。ジロ・ディ・イタリアは大きな成功をおさめ、ガッツェッタの編集者たちはそれまで変動給だったものが、固定給を受け取れるようになったという話だ。

ひとつの新聞社がこれだけの規模のレースを立ち上げ、百年以上にわたり続けていることは、驚くべきことだ。しかも、この百年のあいだには、2つの大戦や、事件・事故、ドーピング問題など、数えきれないほどのトラブルも起きて、開催が危ぶまれることもあったが、今なお粘り強く続けられている。

もうひとつの驚くべき点は、いずれのレースも、イタリア国内、欧州内のみならず、世界中(というところちょっと広げすぎだが)のレース・ファンから注目されるだけのプレステージを獲得しているという点だ。日本でも百年以上続くスポーツ・イベントは各種あるが、残念ながら他国でニュースに取り上げられたり、足を運んで見に来ようと思われたりするほどのものは見当たらない。相撲や柔道、空手など、「するスポーツ」として広まったものはいくつかあるが、「見るスポーツ」としてはどうだろう。言語の問題や内向きの国民性など様々な要因もあろうが、観光やアニメは成功しているので、実際の要因は別のところにありそうだ。そのへんの話をしだすと大幅に脱線しそうなので、このへんで。

ここまでイタリアの状況に絞って話を進めてきたが、当然ながらガッツェッタがすべて一から発案したものではなく、新聞社によるレース開催はフランスが先行していた。フランスではすでに1860年代に自転車レースが開催されていたが、イタリアはまだ統一運動のまっさ中であり、産業面でも後れをとっていたので、後続となったのはやむをえないことだろう。

ともかく新聞社が開催するというのがポイントで、自転車メーカー単体ではここまでうまくいかなかったのではなかろうか。自転車メーカーはまずそ野が広がることによる販売増、新聞は部数増に加えメーカーからの広告収入増、そして観衆はレースを

現場だけではなく、後から読み物としても楽しめるという構図。まさに近江商人の「三方良し」的なビジネスモデルだ。

広告収入と情報発信の両輪によるメディアのビジネスモデルは、のちのテレビ、そして現代のFacebook や YouTube をはじめとした SNS でも、そっくりそのままである。もちろん、自転車レースが「キラークンテンツ」としての力を持っていることは論を俟たない。

さて、メディアと自転車レースの蜜月も、時代の流れとともに変化していく。第二次大戦後、ジノ・バルタリやファウスト・コッピの活躍もあって、自転車はイタリアで最も人気のあるスポーツであり、ガッゼッタでは常に一面を飾ってきた。しかしバルタリが引退し、コッピが早世した後、1960年代にはサッカーがその座を取って代わるようになった。少し時代の下がった1974年の統計では、イタリア人の好きなスポーツの1位はサッカーで、支持率はなんと100%。自転車は続く2位に入るが、60.5%と大きく引き離されている。現在ではもっと開きが出ているだろう。ガッゼッタを開いても、ページの7～8割はサッカーである。

コッリエーレ・デッラ・セーラ等に執筆したコラムニストのエンツォ・ビアージは、生前のファウスト・コッピにインタビューしたときの様子を記している。カンピオニッシモ(最高のチャンピオン)になるには何が求められたのか。コッピはこう答える。

「耐えること。暑さやほこりで息苦しいとき、疲れと不快感に襲われるとき、ひとりぼっちで、がっかりしているときをこらえることが、できるかですよ」

(「新イタリア事情」大西克寛他訳、朝日出版社)

コッピの答えを受けて、ビアージは続ける。「こうした試練を甘受しようという若者はへっていきばかり。ペダルひと踏み何リラかを考える」。

より華やかでより稼げるサッカーに才能のある若者が集まることでサッカーの魅力が増せば、より多くの注目を集めるのは必然だ。

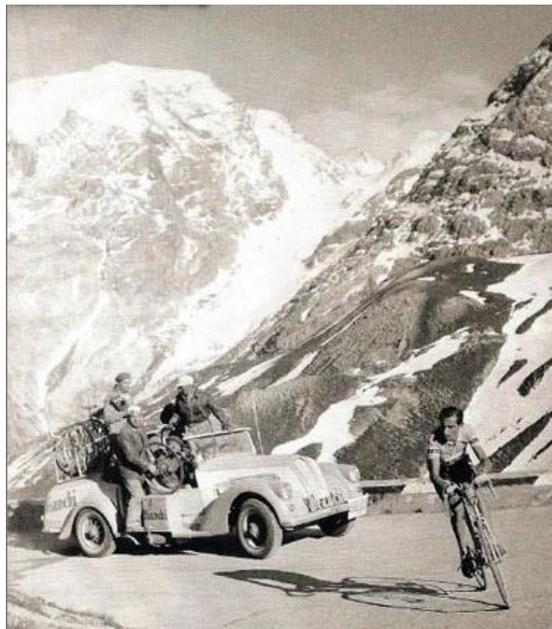
それでも、自転車レースが百年前、八十年前の人々を魅了したように、その魅力を保ち続ける限り、ガッゼッタのコンセプトである「時代の流れを読み、

予測し、先取り」することで、この先も人々を魅了し続けていくことができるだろう。

[参考資料]

- Beppe Conti, *Ciclismo, Storie Segrete*, Armenia, 2003
- John Foot, *PEDALARE! PEDALARE!*, Bloomsbury, 2011
- 『自転車ロードレース教書』(砂田弓弦著,アテネ書房,1992)
- 『イタリアの自転車工房』(砂田弓弦著,アテネ書房,1994)
- 『イタリア入門』(土井正興編,三省堂,1985)
- 『イタリア20世紀史』(シモーナ・コラリーニツィ著,橋本勝雄訳名古屋大学出版会,2010)
- 『新イタリア事情』(大西克寛他訳,朝日出版社,1983)
- 『ヨーロッパの新聞』(佐々木凜一他著,日本新聞協会,1984)
- 『スポーツという文化』(サントリー不易流行研究所編,TBS ブリタニカ,1992)

wikipedia 関連情報



【ファウスト・コッピの雄姿】

出典:<http://www.pezcyclingnews.com/features/un-secolo-di-passioni-italy-and-the-giro-ditalia/>

(当館スタッフ)

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: <http://italiakaikan.jp/>